

平成 22 年 4 月 6 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19730369  
研究課題名 (和文) 認知症介護家族への支援におけるナラティブ・アプローチに関する研究  
研究課題名 (英文) Studies on Narrative Approach in the Support for Family Caregivers of Dementia  
研究代表者  
荒井 浩道 (ARAI HIROMICHI)  
駒澤大学・文学部・准教授  
研究者番号：60350435

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、家族支援、ピアサポート、認知症  
家族会、質的研究、テキストマイニング

### 1. 研究計画の概要

本研究は、認知症高齢者をかかえた家族を支援する技法としてナラティブ・アプローチに着目し、その有効性を理論的、実証的に検証するとともに、ソーシャルワーク理論としての体系化を図るものである。

### 2. 研究の進捗状況

#### (1) 文献レビュー

認知症ケア、家族会、ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、回復の語り、エンパワメント、ケアマネジメント、社会構成主義、ストレングス、セルフヘルプ・グループ、質的調査法、テキストマイニングなどに関する国内外の文献レビューを行った。

#### (2) ソーシャルワークの実践的研究

地域包括支援センター社会福祉士(非常勤)としてナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワーク実践を行い、その実践からデータを収集して分析を行った。

ソーシャルワークにおける「理論と実践の乖離」克服の方向性をポストモダンの対人援助技法としてナラティブ・アプローチに求め、その専門性、固有性を理論的に整理した。そして、わが国のソーシャルワーク実践において、認知症介護家族への支援におけるナラティブ・アプローチの一定の有効性が検証された。

#### (3) 認知症介護家族への参与観察

首都圏の認知症家族会を対象に参与観察(一部業務委託)を行い、逐語録を作成した。司会者、世話人がその場で展開される言語的な営みをファシリテートする方法に着目しながら分析を行った。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進呈している。

(理由)

本研究における当初の研究目的では、認知症高齢者をかかえた家族へのナラティブ・ア

アプローチを用いた支援のうち、個別援助として地域包括支援センター社会福祉士（非常勤）の実践からのデータ収集、また集団援助として、認知症家族会への参与観察による逐語録の作成を予定していた。本研究は現在までに、この当初の計画がおおむね順調に進展している。

#### 4. 今後の研究の推進方策

本研究の今後の研究推進方針として、認知症家族会の逐語録の分析を進め、論文投稿を行う。またナラティブ・アプローチを用いた個別援助、集団援助、地域援助の統合を図り、ソーシャルワーク理論として体系化する。

今後のさらなる展開としては、テキストマイニングによる質的研究の可能性を検討する。

#### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ①荒井浩道（2010）「ナラティブ・ソーシャルワークにおける『回復』のポリティクス—認知症介護家族への支援を中心に」『駒澤社会学研究』42, 13-30, 査読なし.

〔学会発表〕（計5件）

- ①荒井浩道（2009）「ナラティブ・アプローチにおける『書き換え』の技法—『ナラティブ・ソーシャルワーク』の可能性」（第57回日本社会福祉学会大会、法政大学、2009年10月11日）
- ②荒井浩道（2008）「拒否的／消極的利用者への支援—ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチによる介入」（第20回日本生命倫理学会大会、九州大学、2008

年11月30日）

- ③荒井浩道（2007）「ナラティブ・アプローチのソーシャルワークにおける／としての固有性」（第55回日本社会福祉学会大会、大阪市立大学、2007年9月22日）
- ④荒井浩道（2007）「ソーシャルワークの専門性とナラティブ・アプローチ」（第24回日本社会福祉実践理論学会大会、大妻女子大学、2007年6月）
- ⑤荒井浩道（2007）「地域包括支援センターにおけるナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワークの実践」（第15回日本社会福祉士学会大会、阿児アリーナ、2007年6月）

〔図書〕（計1件）

- ①荒井浩道（2008）「繋がっていかない利用者への支援—ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチの可能性」崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編『〈支援〉の社会学—現場に向き合う思考』青弓社, 114-137.